コース２　弥彦山（やひこやま）

リーダー　　ＣＬ　M/N
実 施 日　　平成２８年４月３日（日）　　天　候　曇り
参 加 者　　６　（男性 ６）　　グレード　Ａ上～B
コースポイント

ポイント	到着時間	出発時間	備　　考
森林浴の森		10：00	予定を変更し、森林浴の道から出発
４合目	10：50	11：00	
里見の松	11：15	11：25	
９合目	11：45	11：50	
頂上 634m	12：00	12：40	昼食
４合目	13：20	13：30	
表参道登山口	14：10		到着後、軽くストレッチ。解散

山行等概要（幹事のコメント）

- 最高のハイキング日和でした。家族連れ、友人同士などのグループで賑やかでした。
- 早春の花も群生しており、何年振りでこれだけの多くの花を観られた。
- 頂上では風もなく、昼食を摂ることもできました。
- 帰りは予定のコースを通り、ゆっくり下山しました。
- 出会えた花々
  カタクリ、猩々袴、イカリソウ、キクザキイチゲ、スミレ、コバイモ、アブラチャン、
  オウレン、タムシバ、カンアオイ、サクラソウ、マンサク、奥丁字桜　　(1533)S/S　確認

弥彦山山頂（奥の院）634m にて

「弥彦山山行に参加して、皆さんに是非ご紹介したいこと」

（1676）Y/Y

弥彦山について調べた事など交えながら紀行文風にしてみました。

■地すべり地帯

弥彦山の成り立ちは海底火山が隆起した火山性の山塊で、山麓には地すべり地形が多いとされています。防災科学技術研究所の地すべり地形分布図（第 17 集 「長岡・高田」図集弥彦）を眺めてみると山麓周辺の南側・西側に多くの地すべり地形が認められ、角田山やその周辺には殆ど認められません。こうした地すべり地は、山地では数少ない緩やかな斜面で“コシヒカリの棚田”として活用されている例もあります。

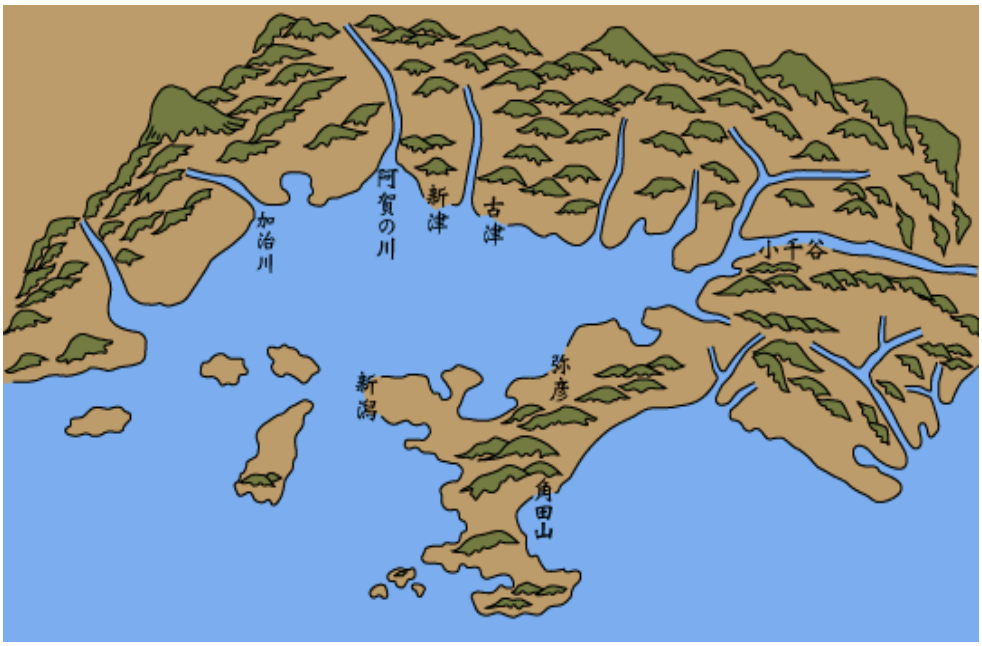
今回は表参道をメインにしたアプローチでしたが、たぶん清水茶屋付近の斜面は地すべり地帯だと思います。次回には地すべり地形図を持参して再度確認してみようと思います。

■タゴガエル

水場付近で「ゴッゴッゴッ」とかなり大きな鳴き声が聞こえてきました、犯人は大きさ４～５ｃｍ前後の森林に棲んでいるタゴガエルです。カエルはオタマジャクシ時代には水中で、変態してカエルになると湿気の多い森林や水辺の陸場に生活の場を移します、水中と陸上の両方の環境が整っていないと生活できないことになります。新潟県に生息するカエルの仲間（両生類）は 18 種で、弥彦地域には 15 種がみられこの地域の自然の豊かさを象徴しています。※1）

■新潟平野の眺望

私は山頂の御札所からの眺望が気に入っています、当日は春霞でもやっていましたが新津丘陵（居住地）が見えるとなんとなくホットします。この山頂から見える平野、昔の様子が知りたくなり探してみたところ下記の越後絵図にたどり着きました（北陸農林局 農村振興部設計課 新潟平野の誕生「白根郷治水史」より転載）。



この絵図は今から 900 年程前の平安時代に描かれたもので図の注釈には「ちょっと想像性が強い」と記されていましたが、この絵からは新潟平野はすべて海だったことになり、新津や古津が港で角田山の先に新しい潟が出現していたと読み取れます。弥彦山・角田山が日本海の浸食を和らげ、信濃川や阿賀野川などが運んだ土砂が海流と季節風の力によって砂丘が作られ、その後の治水工事で現在の新潟平野ができあったという壮大な先人たちの営みを山頂からの眺望で読み取って見たいものです。

■治水の営みは今も続いています

鳥屋野潟周辺地位は海抜ゼロメートル地帯で鳥屋野潟の水位を排水機場ポンプにより水をかきだして、日本海より３メートル低い水位に保たれ治水が行われています。

■メダカの食文化

かってこの平野にはメダカが棲みやすい潟や緩やかな流れなどが多くメダカの一大生息域で、メダカを佃煮などで食べていた時代もありました（今でも養殖メダカを佃煮として販売しているようです）。現在では数を減らしとうとう 1,999 年環境庁（当時）が発表した絶滅危惧種にランクインしてしまいました。

■新潟市に雪が少ないのは

雪雲の流れる方向や高さにも関係するのでしょうが、弥彦・角田山にブロックされる雪雲もあるようで、そんな場合旧新潟市内あたりの降雪量が少なくなるようです。

■多彩な植物相が見られる山

植物は苦手なのでダメなのですが植物の構成別にみると、海浜、暖温帯、日本海要素、冷温帯、太平洋要素、分布の限界となる、植物が見られる山だそうです。※1）

山の事は超初心者で、花はカタクリくらいしか判りませんが諸先輩方からの失笑覚悟で弥彦山について私自身始めて分かった事など交えながら感想をまとめてみました。

参考図書　1）弥彦・角田山から地球環境を考える　編者-ブックレット新潟大学編集委員会
2）弥彦山・多宝山・国上山の生物　弥彦山の自然を愛する会